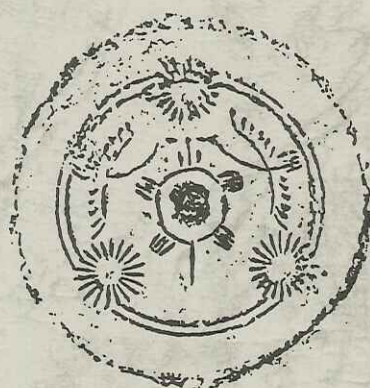


特別史跡

一乘谷朝倉氏遺跡

1998



福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館



第102次発掘調査区遠景（北から）



西山光照寺跡整備地区（東から）

特別史跡

一乘谷朝倉氏遺跡

1998

福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館

序 文

平成10年度第102次発掘調査は、調査面積2,300㎡に及び、大規模な武家屋敷の一部と規模は不明ながら武家屋敷の一部、それに幹線道路を検出し、城下町の区画について新たな知見を得ました。屋敷の遺構の遺存度はそれほどではなかったのですが、出土遺物では土師質土器と中国製陶磁器が高い割合を示し、武家屋敷の特徴を示しています。今回の調査地は字名が「斉藤」であることから、大規模武家屋敷については朝倉義景の愛妾、小少将の父、斉藤兵部少輔の屋敷と推測されており、来年度実施予定の残り半分の発掘調査に期待がつのります。

環境整備は、昨年度に引き続き西山光照寺跡の石仏保存覆屋建設工事を行うと共に、発掘調査の完了している山際部分約3,500㎡について遺構復元整備工事を実施しました。西山光照寺跡は、石仏や桜の見所だけに観光客に喜ばれることと思います。

本年度も地元をはじめ、文化庁、福井市など多くの関係者のあたたかいご協力やご支援を得て大きな成果を上げることができましたことを喜び、心から感謝申し上げたいと思います。

平成11年 3 月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
館 長 青 木 豊 昭

例 言

1. 本書は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が平成10年度に実施した国庫補助事業による発掘調査、および環境整備事業の概要報告書である。
2. 本年度は、「発掘調査・環境整備第2次中期10ヵ年計画」の第2年度にあたる。本書は、第102次発掘調査の成果、および西山光照寺跡石仏覆屋保存整備・遺構復元工事の概要について収録した。
3. 本書の作成にあたっては、資料館員の検討・討議を経て、水村伸行が編集を担当した。また、執筆については、各項目毎に分担し文末に文責を記した。

目 次

巻首図版

序文

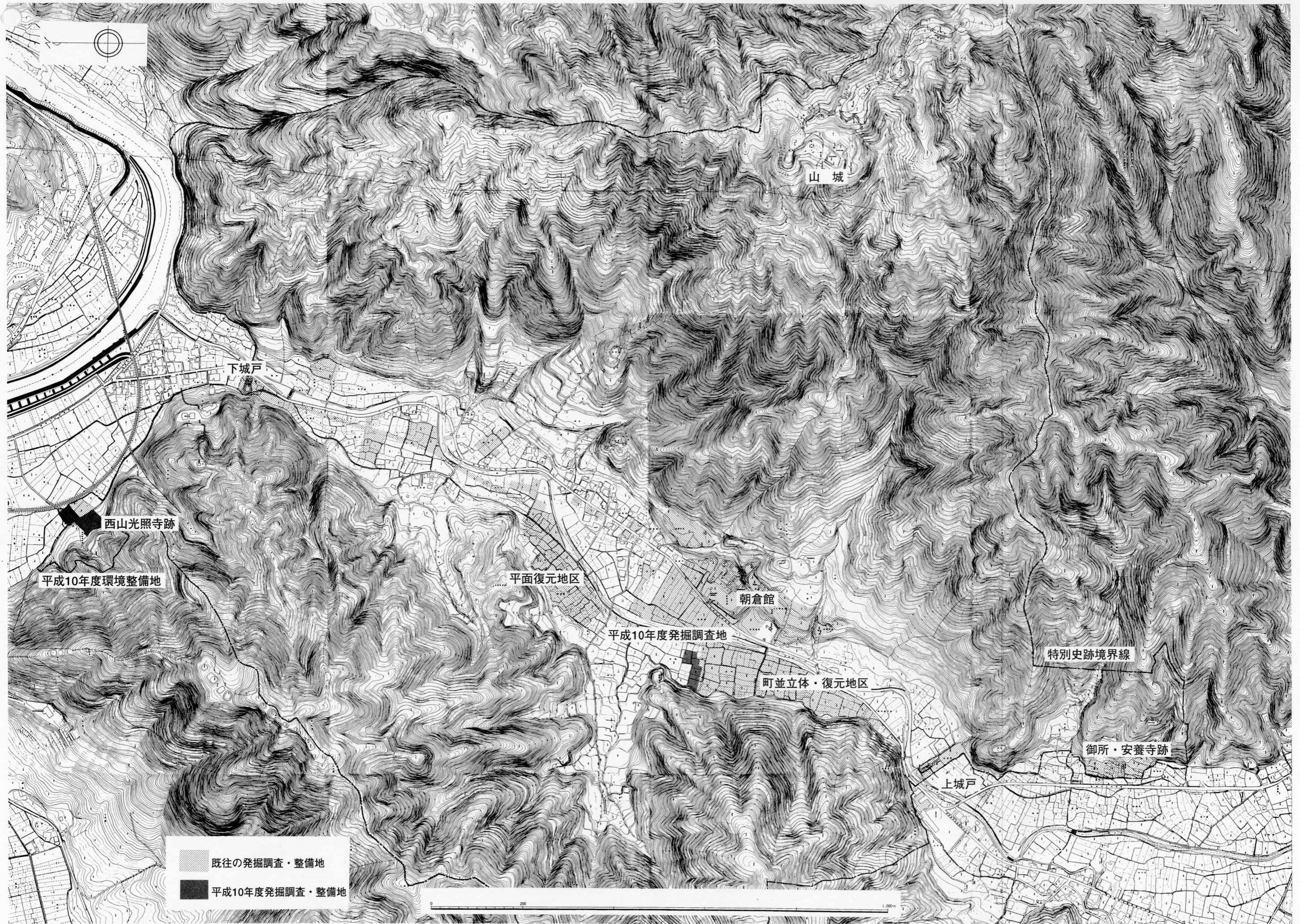
例言

目次

1. 平成10年度の事業概要	3
2. 第102次発掘調査	7
遺構	7
遺物	9
3. 環境整備	16

第1図 平成10年度発掘調査・環境整備位置図	第9図 和鏡・銅銭拓影図
第2図 第102次発掘調査位置図	第10図 整備計画図
第3図 第102次発掘調査遺構全測図	第11図 石仏覆屋建設工事・展示収納棟 平面図・立面図
第4図 SI4762詳細図	第12図 休憩所部及び石仏覆屋・収納展示部矩計
第5図 遺物分布密度	表1 平成10年度事業概要一覧
第6図 第102次調査上層遺構出土遺物 (1)	表2 第102次調査出土遺物一覧
第7図 同 (2)	
第8図 同 (3)	

図版 第102次発掘調査遺構	PL. 1 ~ 3
同 遺物	PL. 4 ~ 6
環境整備	PL. 7 ~ 10



第1図 平成10年度発掘調査・環境整備位置図

1. 平成10年度の事業概要

本年度の国庫補助事業による発掘調査事業は、環境整備に伴う事前発掘調査としては第102次調査のみであった。調査区は、平成5年度に実施した第82次調査区の北側、町並立体復原地区に隣接する地点であり、面積は約2,300㎡を測る。隣接する第82次調査区において大規模な武家屋敷が検出されていたことから、本地区についても計画段階より武家屋敷の存在が想定され、発掘調査の結果からもそのことが裏付けられた。発掘調査は、4月当初に表土剥ぎをおこなうことから調査を開始したが、4月には県土木部による一乗谷川河川工事に起因する緊急発掘調査をおこなったため一時、調査を中断することとなった。調査の概要については次章を参照されたい。

環境整備は昨年度に引き続き、平成6・7年度に第86・87・90次発掘調査としておこなった西山光照寺跡について、旧石仏覆屋の建替えに伴う建設工事と、発掘調査により新たに出土した石仏を収納する展示収納棟の新築工事を実施した。また、これらの工事に併せて、排水および遺跡全体の修景を兼ねて池の修景工事をおこなった。遺構復元については、地下式倉庫と礎石建物・石積遺構を中心に実施し、あわせて周辺の芝張り工事もおこなった。詳細については各項目を参照されたい。（水村）

調査次数	調査箇所	調査期間	面積	調査理由
102次	城戸ノ内町字齊藤	4月1日～12月20日	2,300㎡	計画調査
103次	城戸ノ内町字米ノ津	4月1日～4月7日	100㎡	河川改修による委託調査
環境整備箇所	期間	整備事業内容		
安波賀中島町字西山 安波賀町字上西山	平成11年1月16日～ 3月27日	西山光照寺跡の石仏覆屋建設工事 及び遺構復元工事		

表 1 平成10年度事業概要一覧



第2図 第102次発掘調査位置図 (S= 1 / 2000)



第3図 第102次発掘調査遺構全測図

2. 第102次発掘調査

本発掘調査区は、先に述べたように第82次発掘調査区の北側に隣接しており、発掘調査の結果、大規模な武家屋敷の一部と規模不明の武家屋敷の一部、および幹線道路を検出することができた。調査区全体にわたり後世の改変がおよんでいたことから、全体的な遺構の残存状況はよくなかったものの、地区割りなど本地区の様相を把握することは可能であった。

遺構（第2～4図、P.L. 1～3）

遺構については南北道路SS260を基準にして、西側に展開する遺構群と東側に展開する遺構群に大きく分類することができる。西側の遺構は大規模な武家屋敷（武家屋敷A）の一部と想定され、調査区内においては建物等が確認できなかったことから、屋敷内においても広場的な空間として用いられていた可能性が高く、建物等は北側に続く調査区域外に存在するものと想定される。東側の遺構については後世の改変が大きかったことから詳細については不明であるものの、検出された土塁および門の性格から武家屋敷（武家屋敷B）であったものと考えられる。

SS260 立体復原地区を縦断する南北道路であり、町割を実施するにあたっての骨格をなす **基準道路** 道路である。立体復原地区北端において西へ約5m矩折になる部分に接続する。延長約38mを検出し、幅は約4mを測る。全面砂利敷きであるが、側溝は認められない。道路を横断するように設定したトレンチによる所見では、道路面は1面のみを確認した。

SX4761 SS260の路面上西側部分の一部において検出した笏谷石製の切石群である。飛石状に設置されているが、その性格については不明である。

武家屋敷A

武家屋敷

SA4760 SS260と武家屋敷Aを区画する土塁であり、後述する門SI4750より北側に延びる。延長約22mに渡り検出したが調査区域外へ延びているため、全長については不明である。先に述べたSX4761は本遺構の前面に設置されていた。

SA893 武家屋敷入口の門であるSI4750より南に延びる土塁である。延長約12mを検出したが、後世の改変が大きく石垣自体は道路上に倒された状態で検出された。

SI4750 先に述べたSA893とSA4760に挟まれた幅約3.8mを測る門である。北側の袖石は原位置において確認し得たが、南側の袖石は道路上に倒壊していた。踏石として、幅0.3m・長さ1.8m・高さ0.4mを測る笏谷石製の暗渠2本を逆位にして転用している。本タイプのような門構造は本遺跡において初見のものである。

SE4751 門より武家屋敷内に入ってすぐ左側に位置する井戸であり、内径で約1.0mを測る。発掘調査の安全上から未完掘のため深さについては不明である。

SD4752 SE4751の北約1.1m付近から延びる溝であり、北方向へ伸びたのち西方向へ屈曲しSD4753へ接続する逆L字形を呈する溝である。

SD4753 直線的に北方向へ延びる溝であり、調査区北端でSD4752と接続する。流路は北へ流れていたものと考えられる。

SD4756 西方より東方へ流れる溝であるが、後世の改変のため延長1.5mを検出したにすぎない。SD4755に接続する。

SD4755 SD4753と同じく南方から北方へ延びる溝であり、SD4756との接続部分のみを検出した。

SD4757 西方より東方へ延びる溝であるが後世の改変が大きく、延長2.5mのみを検出したにすぎない。

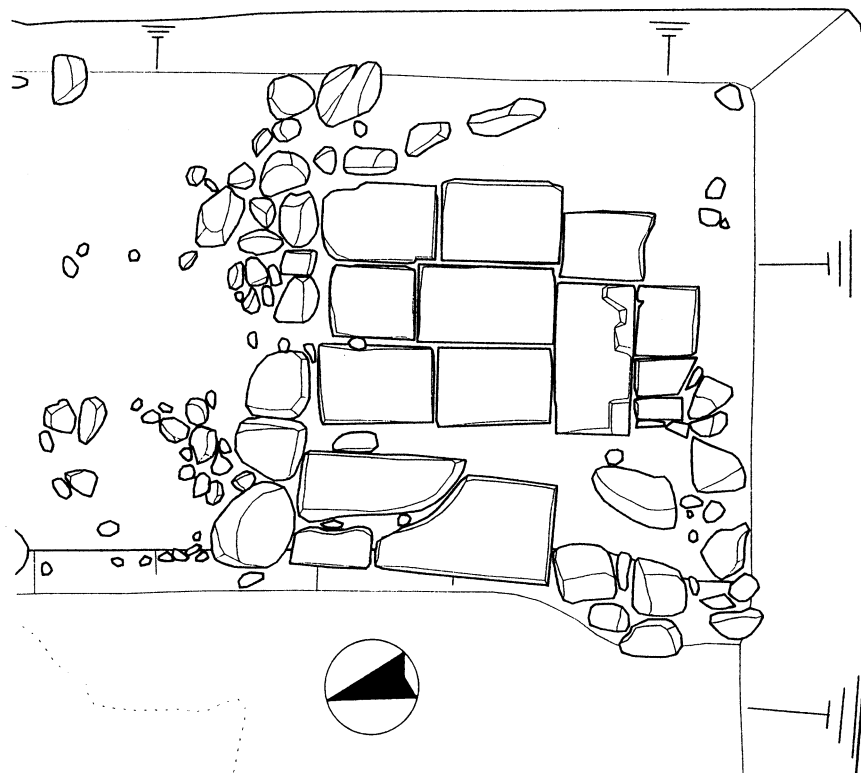
SX4758 倒壊した1～1.8m前後の巨石の周りを人頭大の石が囲むような状態で検出された。その周囲には粒子の細かい白砂が散っていたことから、庭園遺構が存在していた可能性を想定することができる。

武家屋敷 武家屋敷B

SA4763 武家屋敷跡Bと道路を区画する土塁であり、延長34mを検出した。北端については調査区域外のため不明であるが、南端についてはこの屋敷の門であるSI4762と接している。

SI4762 東側武家屋敷の門であり、北側はSA4763に接している。笏谷石製の切石11枚を敷き並べた構造を持っており、本遺跡において初めて確認されたタイプの門である（第4図）。

下層遺構 SX4764 武家屋敷内下層より検出した石列であるが倒壊した状態で検出された。長さ約1～1.5mを測る石を組合わせていたものと想定されるが、上層の遺構群を構成する際に倒壊させ整地をおこない、武家屋敷Bの区画を造成したのと考えられる。（水村）



第4図 SI4762詳細図 (S=1/50)

遺物（第5～9図、PL.4～6）

第102次調査で出土した遺物の総数は5,341点である。その内訳は越前焼931(17.43%)、土師質土器2,679(50.48)、鉄釉64(1.20)、灰釉27(0.50)、瓦質土器14(0.26)、中国製陶磁器・青磁424(7.93)、同白磁748(14.00)、青花白磁207(3.88)、金属製品21(0.39)、石製品132(2.47)、木製品4(0.07)である。調査面積は2,300㎡であり、面積比率にすると2.32/㎡点となり、これまでの一乗谷におけるどの調査区よりも極端に少ない数字を示す。各器種別内訳においても、越前焼17.43%、土師質土器50.48%、瀬戸・美濃焼1.70%、瓦質土器0.26%、中国製陶磁器25.81%、朝鮮製陶器0.00%を示し、土師質土器と中国製陶磁器が異様に高い数値を示す。これは、遺構の項でも触れたように、今年度の調査区が字「斉藤」地係武家屋敷の南側半分の

出土遺物
内訳

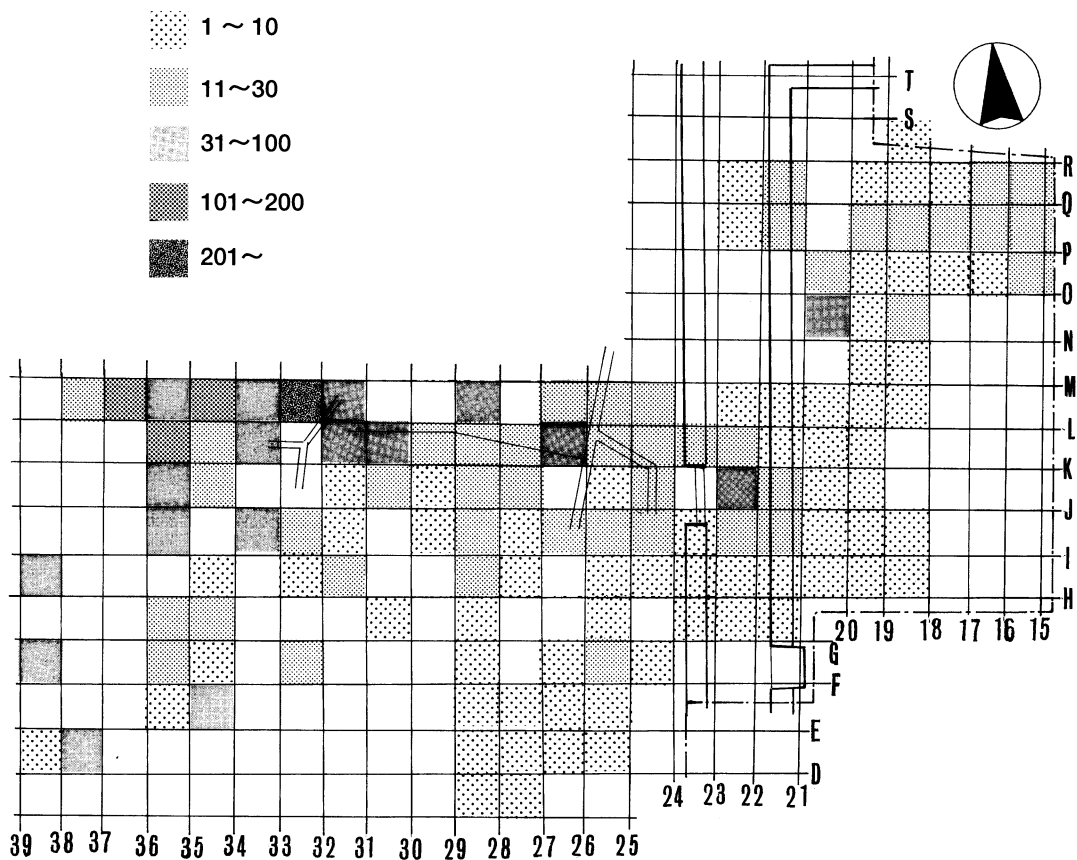
器種	点数	%	器種	点数	%		
日本製陶磁	越前焼	甕	637	中国製陶磁	碗	52	
		壺	132		皿	309	
		鉢	29		鉢	11	
		播鉢	122		壺	4	
		その他	11		角坏	19	
	計	931	17.43		香炉	6	
	土師質	皿	2,672		花生	7	
		土釜	4		飛青磁	2	
		土鍋	1		その他	10	
		その他	2		計	424	7.93
	計	2,679	50.48		白磁	碗	3
	鉄釉	碗	44			皿	669
		皿	1			坏	57
		壺	13			壺	5
		水滴	3			角坏	9
	その他	3	計		748	14.00	
	計	64	1.20		青花白磁	碗	42
	灰釉	碗	2			皿	144
		皿	11			坏	17
		鉢	12			壺	2
香炉		1	器台	1			
その他	1	計	207	3.88			
計	27	0.50	中国・その他	4			
瓦質	火鉢	2	朝鮮・その他	1			
	火舎	1	小計	1,384	25.91		
	風炉	3	金属	銅銭	10		
その他	8	釘		2			
計	14	0.26		鉄鉢の玉	2		
国内陶器・その他	火鉢	2		キセル	1		
	火舎	1		鏡	1		
近世・その他	84	煎盤		1			
計	85	1.59		その他	3		
小計	計	3,800		71.15	計	21	0.39
	石製	木製品		炭	3	バンドコ	15
漆塗				1	笏谷石	1	
計			4	0.07	白	2	
合計			碗	52	硯	7	
			皿	309	駒石	1	
			鉢	11	盤	5	
			壺	4	砥石	5	
角坏	19	その他	96				
香炉	6	計	132	2.47			
花生	7	合計	点数	5,341	100.00		
飛青磁	2		%	100.00			
その他	10						

表2 第102次調査出土遺物一覧

敷地分と、南北道路を挟んだ川側の区画分の遺物総数ではあるが、川側は表土、床土以外は殆ど遺物が出土せず、概ね「斉藤」地系の南半分の敷地分に限られた遺物の組成の結果であろうと考えられる。しかも遺構の遺存度が良くないことと符合して、他の武家屋敷のどの地区よりも点数が少ない。ちなみに字「斉藤」の屋敷分だけで面積比率を求めると4.96/m²点となり、第20次調査出雲谷の5.26/m²点に近い値である。

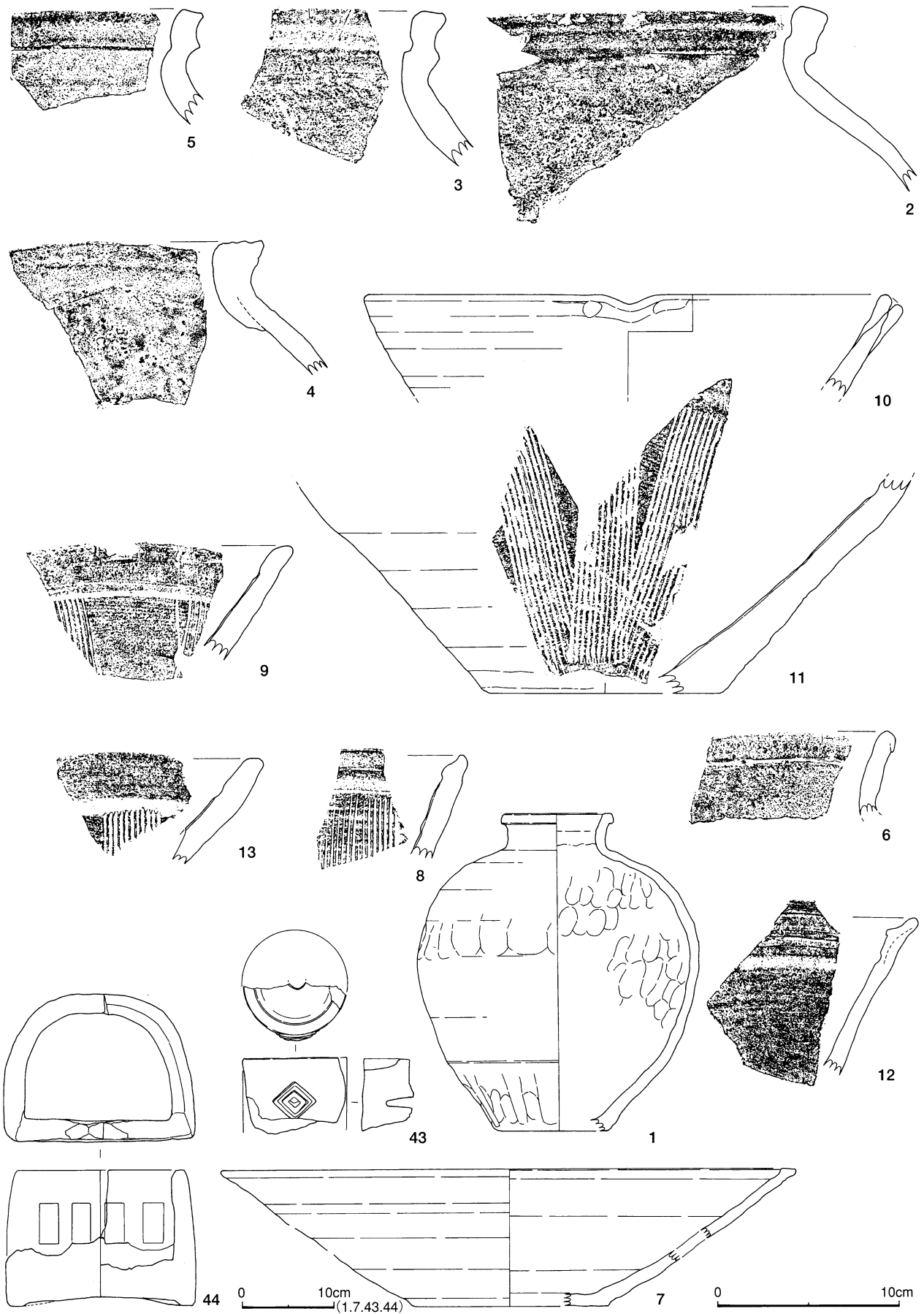
遺物の分布密度

第5図に示した遺物の分布密度（註1）を見てみると、削平が行われたと見られる調査区南半から川側にかけては0か、もしくは10点未満のグリッドが多い。それに対して、調査区の北側では100点あるいはそれを超すグリッドが目立っている。特に調査区境界のJ～L列の30ライン以西でその傾向が顕著である。武家屋敷の奥側に位置し、水田の畔によって1段高くなっている区画である。調査区南東、同東側で密度が薄くなっていることから、遺物の分散する状況は屋敷の奥の北側を中心に、同心円状に周囲に向かって広がっているように見える。ちなみに、本調査区の東半部分（川側）に隣接する第25次調査（註2）では、遺物の出土総数が約4,000点で、そのうちの3/4が第15次調査の武家屋敷（註3）に属する範囲からのもので、今回の第102次調査区に隣接する区画分は1,000点ほどであったという。



第5図 遺物分布密度

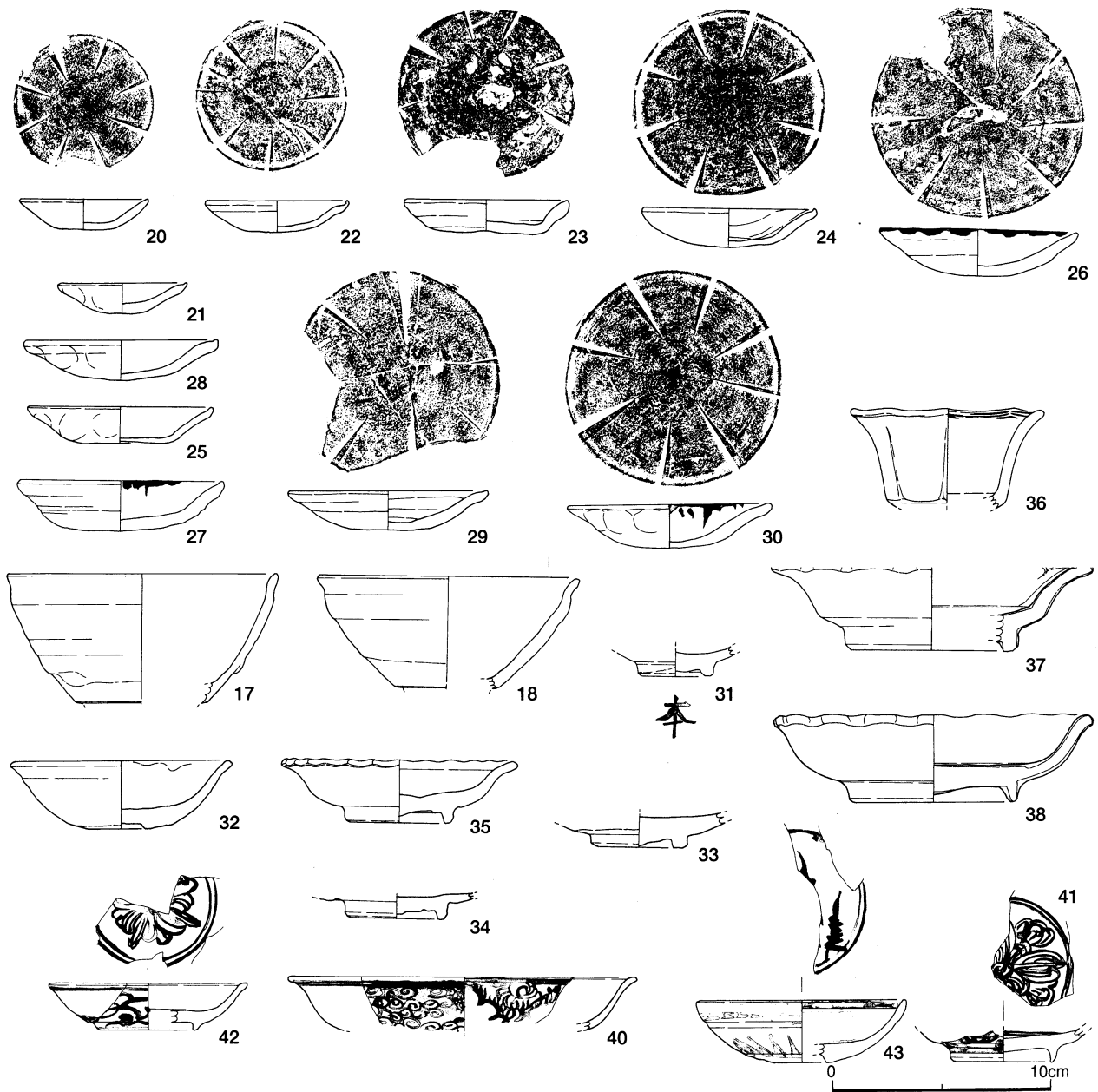
- 1) 各グリッド毎に出土総数をカウントし、1～10、11～30、31～100、101～200、201～の5段階に区分して表示した。
- 2) 朝倉氏遺跡調査研究所1978『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅸ 昭和52年度発掘調査整備事業概報』参照
- 3) 朝倉氏遺跡調査研究所1976『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅶ 昭和50年度発掘調査整備事業概報』参照



第6図 第102次調査上層遺構出土遺物(1)

上層遺構

今回図版に示した「上層遺構」とは表土から遺構検出に至るまでの掘り下げ段階での出土遺物をさす。削平によって遺構の大半は失われているが、遺物は主としてこの上層遺構面の調査区西半部分で出土している。以下、南北道路や東半部分の、遺構を検出したレベルでの出土遺物（下層）とを区分して取り扱い、量的にまとまっている上層遺構での出土遺物を紹介することとする。



第7図 第102次調査上層遺構出土遺物(2)

越前焼

全体に遺物の出土総数が少ないことに比例して、越前焼の出土も少なかった。甕埋設遺構も検出されておらず、この点でも大甕の出土傾向の低さにひとつの要因が見られる。甕、播鉢をみると、Ⅲ群からⅣ群にかけての製品が多く、それより古手の製品は殆んど見られない。甕は特にⅢ群cが目立つ。これと関連して、本調査区から一定量出土している近世以降の陶磁器類、特に一乗谷滅亡直後から、北庄～江戸初期にかけての所産とみられる陶磁器がある。紙幅の関係でいちいち図示できないが、越前焼、瀬戸製品、唐津などが見られる。

1 はほぼ完型に復することができた越前焼の壺である。器高34.4cm、胴部最大径30.8cmを計る。胎土は灰黒色を呈し、焼成は極めて良好である。口縁部は玉縁とせず、10mmほどの肥厚帯としている。14は寸胴型の広口壺である。器高20.8cm、胴部最大径17.9cmを計る。器壁は厚めに成形され、底部近くで16mmを計る。口縁部は外反し薄くナデ上げている。2～5はいずれもⅢ群cに属する大甕である。口端部は水平とならず、外傾する。これに対して5はⅣ群の大甕である。

9・10・13はⅢ群の播鉢で、口縁部下の圏線との間の無文帯がやや幅広になる特徴をもっている。これに対して、8は無文帯が短く、口縁部が内側に傾斜し、また口端部が鋭角的にナデ上げられておりⅣ群に属する。12は鉢であるが、形態からみて最末期以降の所産と見られるものである。

土師質土器他

基本的には口縁部に煤（灯芯油痕）が付着するものと、付着しないものとの2者がある。後者は灯明皿の未使用のものと酒杯など供宴に使用されたものとが考えられるが、灯芯油痕の付着しないそれらは、特に口径の小さいC類タイプに多く見受けられる。

20～22は口径6cmのC類の皿である。しかし23は口径7.5cm、器高1.3cmを計る皿であるが、全体に厚く成形され、口縁部は強く折曲げられて見込みは深い。外面に強いナデによる凹線が巡る。いわゆるC類のタイプとは異なる形態で、口径はやや小さいが柚山城・阿久和Ⅱ-A類（註4）に酷似する。24以下は口径9cm、或いはその前後に収まるC類の皿である。44は瓦質火鉢の口縁部破片で菱文が巡る。肩部には透かし孔がみられる。外面は火はじが多くみられ、荒れている。

瀬戸・美濃焼

通常の鉄釉碗・皿に加えて兔を模した水滴や、大海形の茶入、耳付き水指、四耳壺など茶道具や文具関連の遺物が目立つ。

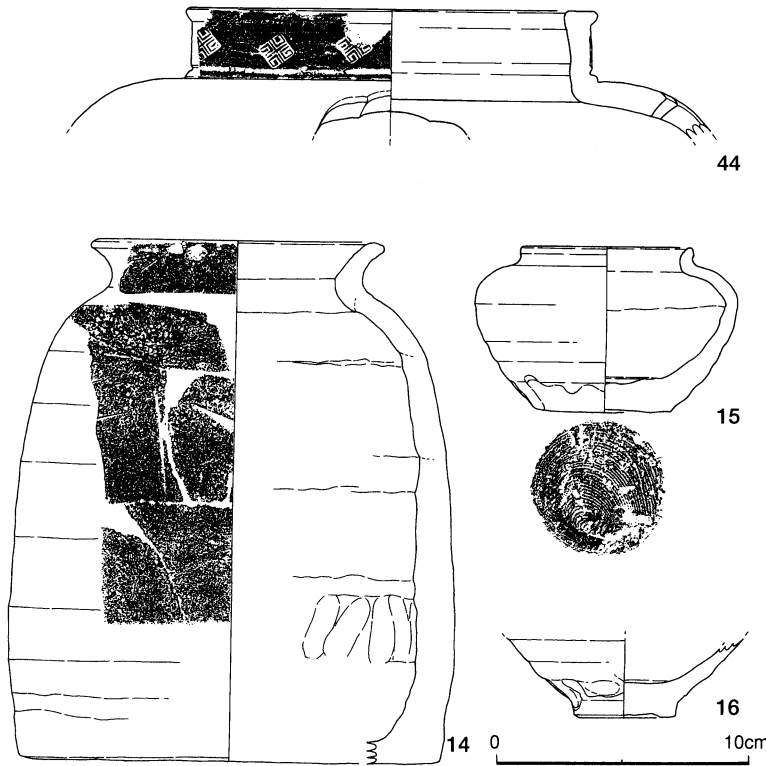
15は大海形の茶入である。口縁部、肩部に釉禿が見られる。底部裏面は糸切底となっている。16は鉄釉碗底部である。釉調は良好で、厚めにタツプリと施される。光沢がみられる。高台は削り出しの輪高台で、高台裏の内ぐりは浅い。17・18は碗の半欠破片で、前者は器壁が4mmで、比較的薄いのにに対して後者は6mmである。胎土も後者は褐色に近く、ボンボンしている。

4) 柚山城・阿久和での調査によって、出土遺物が14世紀をはさみ、12世紀、13～14世紀、14～15世紀の3時期に分けられている。23のカワラケは後者の14～15世紀に含められるものと考えられる（朝倉氏遺跡調査研究所1978

『史跡柚山城跡Ⅱ 伝阿久和宮跡外濠確認発掘調査報告』南条町教育委員会）。

中国製陶磁器

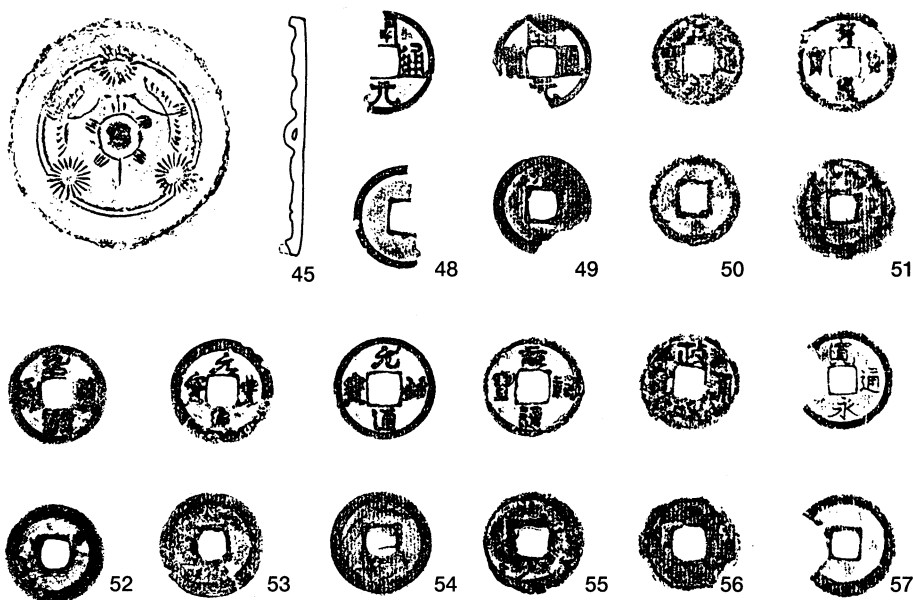
青磁には明代の線描蓮弁文碗に加えて、雷文帯の碗が見られる。皿には腰折の綾花皿が目立ち、青磁製品の多くを占める。36は端反りの八角杯である。内面に区画文をもつものと無文のものがある。38は稜花皿である。37・39は花卉形の皿である。いずれも数個体分が出土しているが、完型に復せるものはない。



第8図 第102次調査上層遺構出土遺物(3)

白磁にはいわゆる景德鎮の端反り皿と、青白色もしくはやや緑色がかった薄い透明釉の皿が目立つ。後者は胎土も景德鎮のものと比較して甘く、ボソボソした感がある。口縁部は端反りで、輪花状を呈するものと、ギザギザの口縁部形態をもつものがある。今回の調査区では特に量的にまとまっており、注目される。胎土の甘い状態や、釉調、高台部の削り出しの特徴は一乗谷で一定量出土している割高台皿の特徴と酷似している。

31は高台裏に墨書きで「本」が描かれる小杯である。釉調は透明にちかく、胎土はあまい乳白色を呈する。33は口縁部が緩く内湾する皿で、釉調は32と同



第9図 和鏡・銅銭拓影図(S=2/3)

様の皿である。これに対して32は基筒底を有する端反りの白磁皿で、釉調は白く、にぶい光沢がある。35は花卉形の皿であるが、高台部を露胎とする胎土のあまい、特徴ある一群の皿である。釉調は浅い緑色を呈し、細かい貫入が見られる。34も同一の皿高台である。

また、昨年の第100次調査区や第51次調査（医者の家）などで出土している、口禿白磁皿が数個体分出土している。この種の器型は内湾皿と端反りの皿だけであったが、小型杯の破片が確認され、器種はバリエーションをもっていることが判明した。青花白磁、いわゆる染付製品には碗・皿が多い。注目すべきものに、かつて第25次調査区でも出土している元末明初にかかると小型器台の破片がある。これは同調査区のものと同コーナーで接合しており、後世の水田もしくは別の理由によるものかは断定できないが、削平・攪乱による遺物の拡散状態がよく判る一例となった。40は端反りの宝相華唐草文皿、41・42は見込み内面に十字花文をもつ皿、43は芭蕉文の内湾する皿である。

元末明初小型器台

金属製品

釘、和鉄、煙管などの他に銅鏡（45）（第9区）が出土した。径5.4cm、背面には双鶴亀菊花散らしの文様が見られる。遺存度は大変良好で、土層に近い下層整地土中より出土した。特筆すべきはかつて第25次調査で出土した銅鏡（概報Ⅸ）に文様が酷似しており、サイズが若干大きめであること以外は同じものと考えられる。第25次調査区は本調査区のすぐ南隣であり、あるいはセットで用いられたものが何等かの理由で散らばったものかも知れない。

双鶴亀菊花散文鏡

銅銭は計10枚出土した。銭種はそれぞれ開元通寶（48・49）、祥符通寶（51）、熙寧元寶（52）、元豊通寶（53）、元祐通寶（54・55）、政□通寶（56）、寛永通寶（50・57）の7種である。

石製品

硯、砥石、バンドコ、盤など通常の出土遺物の他に、遺構の一部でもあり取り上げることができなかったが、門（SI 4762）の敷石に使用された板石や、門（SI 4750）の階段框（カマチ）石に転用された「U」字型排水溝、あるいは溝の蓋石に使用された板石、更には井戸枠等々がある。

46は半欠の茶臼（上臼）である。一部に煤を吸った痕跡がある。挽手の部分は3段菱形の装着部となっている。47はD型のバンドコ（身）である。前面の空気窓部分と、側面（左）を欠く。他に図示できなかったが、O型のバンドコ（身）もほぼ1個体分出土している（註5）。

（南 洋一郎）

5) バンドコの形態分類については平面的な形状から、楕円形のをO型、窓が直線的なものをD型と便宜上、呼び分けている。

環境整備（第10～12図、PL.7～10）

環境整備は、昨年度に引き続いて西山光照寺跡の石仏保存覆屋建設工事を行い、併せて発掘調査が終了している山際の部分、約3,500㎡について、遺構復原整備工事を実施した。これにより、下城戸以北の資料館と城戸ノ内とをつなぐ見学道路に、西山光照寺跡がひとつの見学拠点として加わり、大型石仏群を数多く残した一乗谷の重要な寺院跡のうちのひとつを遺構の様子とともに見学できることとなった。

以下、その内容について概要を述べる。

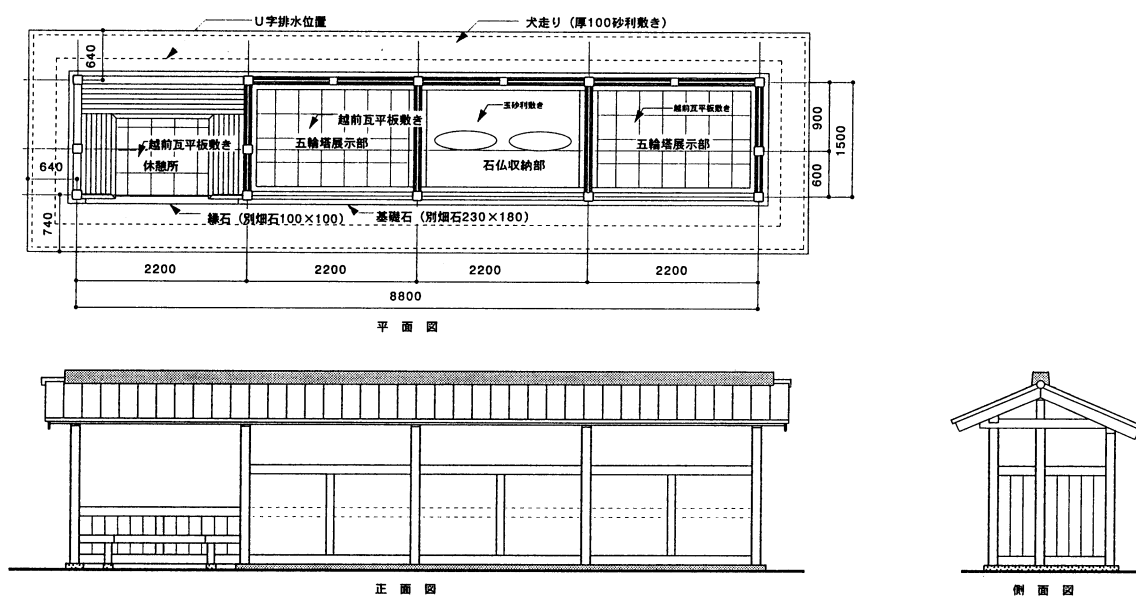
石仏保存覆屋建設工事（第11・12図、PL.7）

昨年度に引き続いて、大型石仏群の覆屋建設工事を実施した。今回は予定されていた5棟石仏展示収納棟の覆屋のうち、残りのB棟とその他の野ざらしになっていた石仏、五輪塔などを展示・収納する石仏展示収納棟の建設を行った。

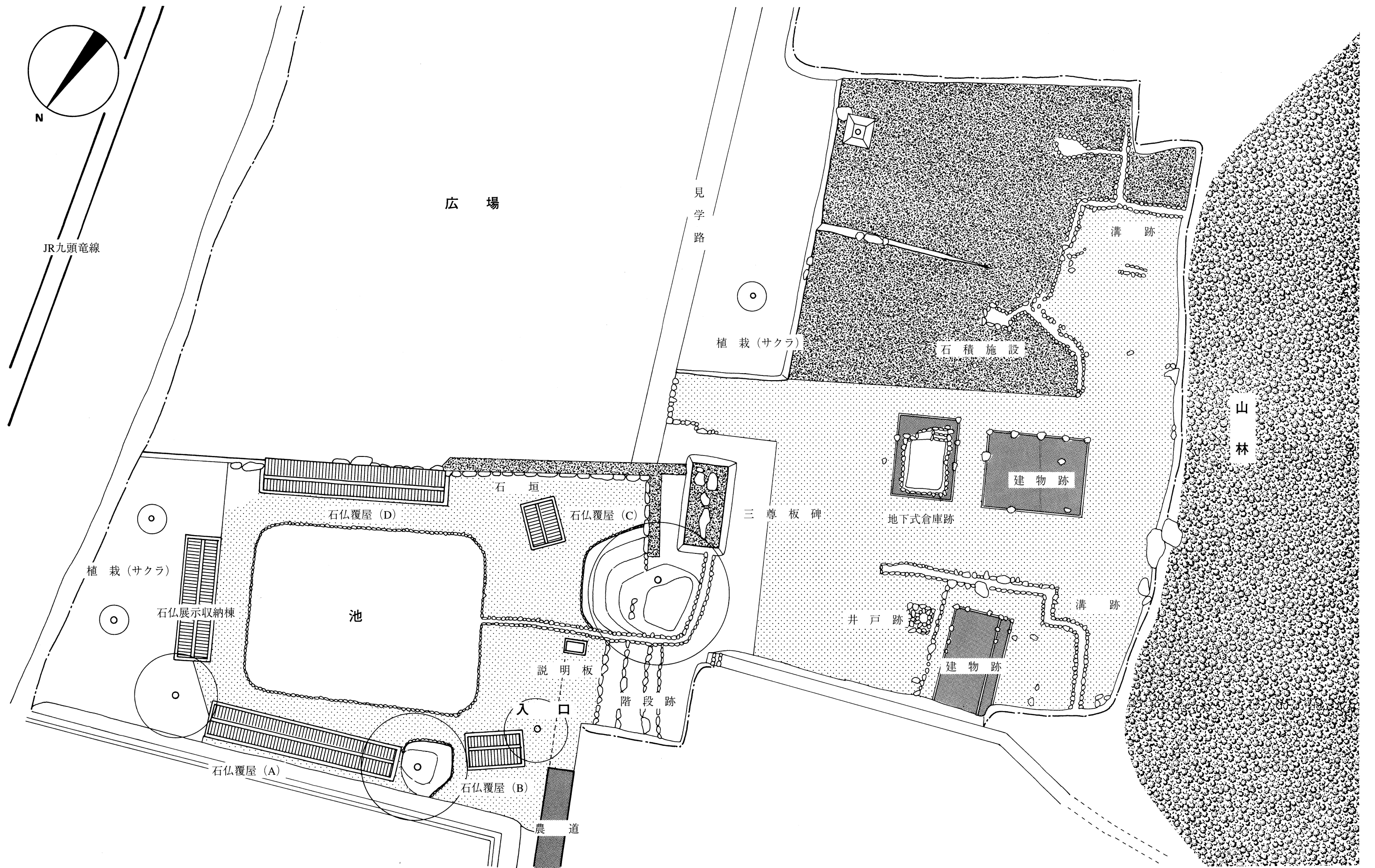
B棟は現位置にそのまま、建て替えを行った。仕様は昨年度のA・D棟と同じである。石仏展示収納棟については、JR線側に大型石仏群全体が眺め渡せるように、また後述する寺院側の遺構復原地区が見通せるように西向きに配置して、建設工事を行った。間取りは4区画とし、左端には見学者の便を図って、休憩用のベンチを置いた。他の3区画には、これまで野ざらしになっていた石仏2体やA～D棟内にあった地藏仏などを中央の区画に安置し、両脇には五輪塔、石塔片及び発掘調査によって出土した石塔などを安置した。

鑑賞池修景工事

池の修景工事については、従来より参道として石仏群の中央を東西方向に走っていた道を



第11図 石仏覆屋建設工事・展示収納棟平面図、立面図



第10図 整備計画図 (S= 1 / 200)

取り払い、遺跡全体の排水及び石仏群の鑑賞にマッチした自然景観の組合せを考え、参道の脇が石垣積みで段差があったことから、池として採用し、修景した。従来の石仏の前にあった石垣は撤去せず、そのまま埋め立て、別途に池の石垣積みを行った。また、池の範囲部分はトレンチ程度の試掘以外には発掘調査がなされていないので、底うちを行わず、自然排水とした。植栽としては菖蒲を10株植え付けて、鑑賞に供した。

西山光照寺跡遺構復原整備工事（第10図、PL.7～10）

この地区の整備にあたっては、以下の点に留意し基本的なコンセプトを置いた。平成6・7年度の発掘調査の成果から、遺構が比較的良好に検出された区画と、水田耕作やJR九頭竜線の線路敷設工事の土取りによって、大きく削平され遺構の遺存状態が悪い区画とに分離し、それぞれ手法を変えて整備を行なうこと。大型石仏群、池など遺跡全体の調和・統一を図り、バランスを保った整備を行うこと。遺構の遺存度のよい山際部分については、発掘の成果から本堂と見られる礎石建物が1棟分、及び大量の中国製陶磁器や越前焼が出土した地下式倉庫跡の建物を復原表示することとし、厚5cmのレミファルト舗装を施した。地下式倉庫跡は発掘面が深く、段差が大きいので、一部埋め戻し段差を70cmに抑えた。中央には御影石による遺構表示石を据え付けた。北側の礎石建物については、後世に堂守の僧が居住した建物と重なっており、幾分遺構に不明な点があったことから、明確なレミファルト表示によらず、調査成果によって判明した建物範囲を境界ブロックで表示するに止どめた。付設する井戸は、流しに使用された周囲の石敷の補充を行い、天端石は遺存度が良いのでそのまま露出展示とした。また、この礎石建物の南側を流れる溝は、建物を取り囲むように墓地のある谷部分から南北に流れ出て、一旦直角に折れ曲がって、建物に近いところでもう一度曲がって東西に延びている。下層では巨石を配した池庭状の施設になるようであるが、上層の時期に併せて排水溝として遺構復原した。只、東側は残り具合が良くないので無理に延長せず、排水の便を考えて、暗渠とした。配水管にはφ10cmのネトロンパイプを埋め込んだ。この暗渠は、三尊板碑の横で開渠とし、入口階段の排水溝から池に流れ込むようにした。

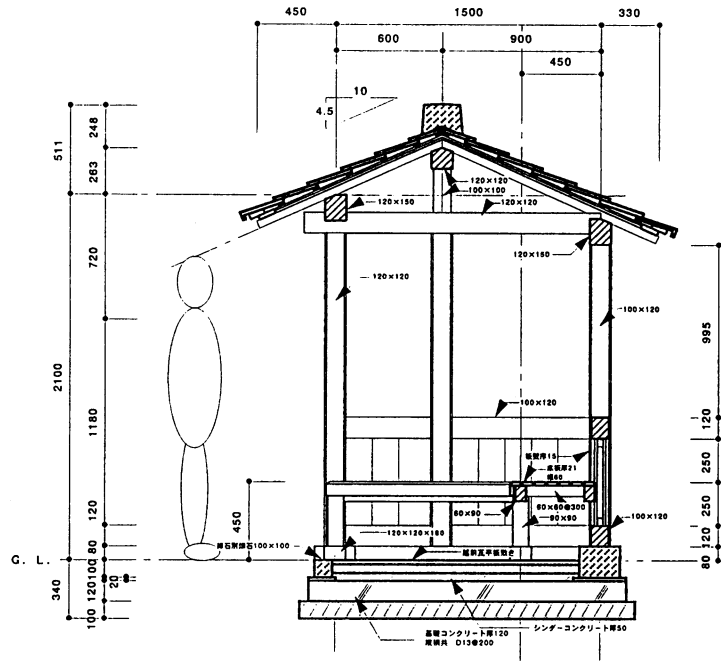
地下式倉庫跡

三尊板碑は他の遺構面よりも一段高くなっており、両側にも石垣状に巨石が並んでいることから、そのまま土手状に残して露出展示することとした。しかし、以後に崩落することが予想されるため、表面を突き固めて芝張りを行った。また、三尊の種子を書き込んだ表示石を据え付けた。入口階段は4段の階段として転落した石を補充し、山土舗装による整備を施した。山際南半部分については、石積施設や、溝、砂利敷が見られる他、多数の柱穴が検出されているが、下層遺構でもあり、また明確なまとまりに欠けることから、溝、石積施設などの他は敢えて遺構表示はせず、下層遺構群のゾーンとして区分し芝張り整地とした。この場所も、山際からの浸み出しによる水の溜りやすい場所であることから、南端調査区に並行して暗渠排水のパイプを埋め込んだ。線路側に寄った東半部分については、下城戸へ通じる幅1.8mの見学道路を通し、その脇にはサクラを植栽した。見学道路の東側平地部は自由に憩える緑地空間として位置付け、埋め戻し整地のままとした。入口導入部には北向きに笏谷石を組み合わせた基礎石の説明板を設置した。

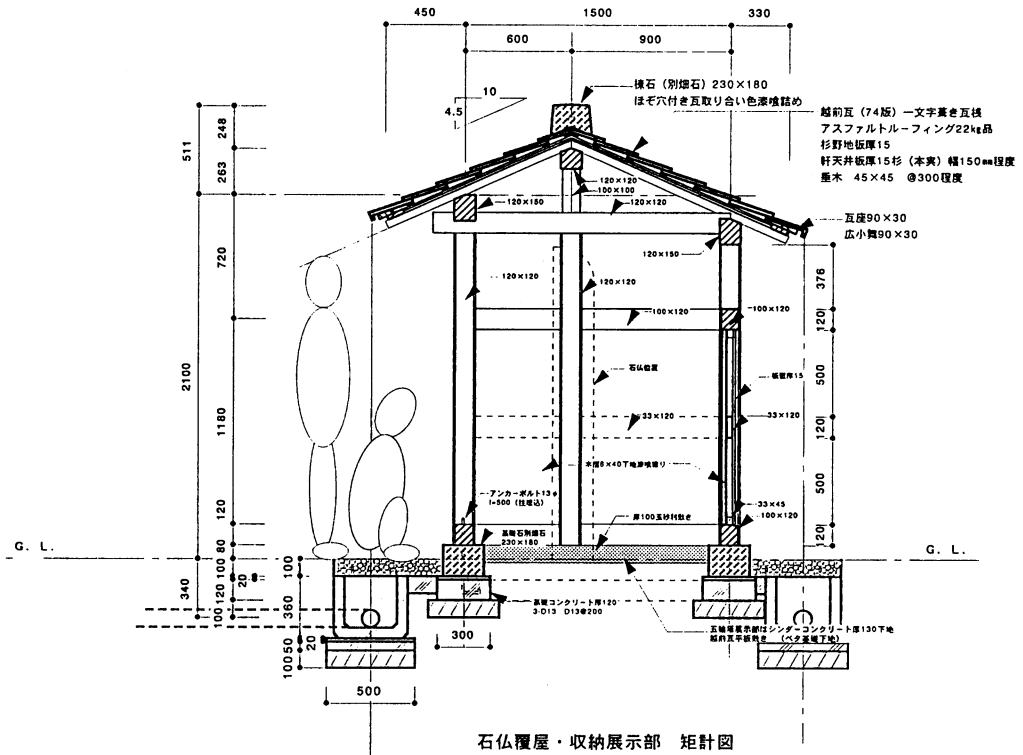
三尊板碑

緑地空間

（南 洋一郎）



休憩所部 矩計図



石仏覆屋・収納展示部 矩計図

第12図 休憩所部及び石仏覆屋・収納展示部矩計



調査区全景（東から）



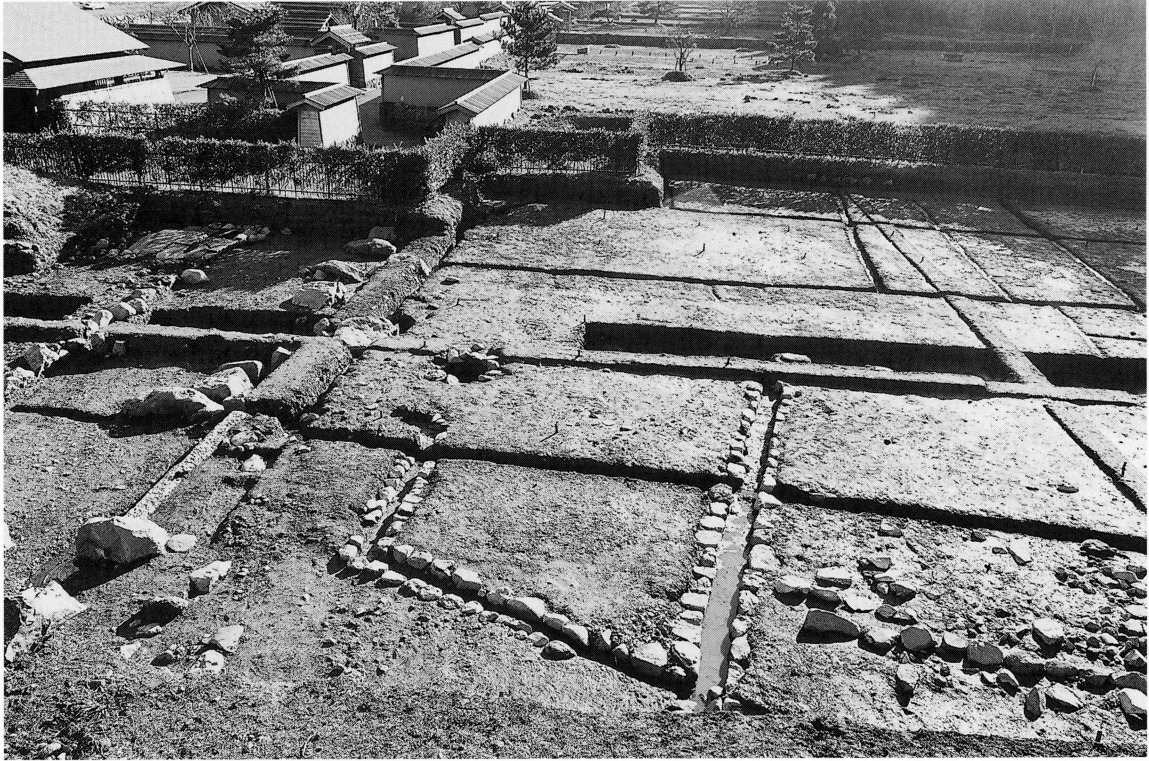
調査区全景（北から）



門 SI4750近景（東から）



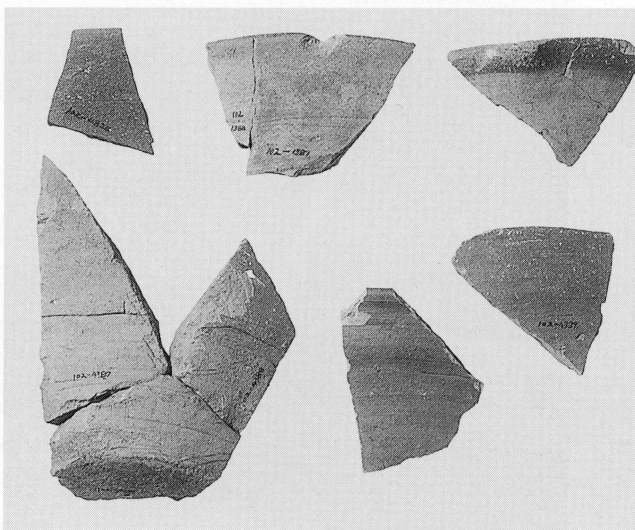
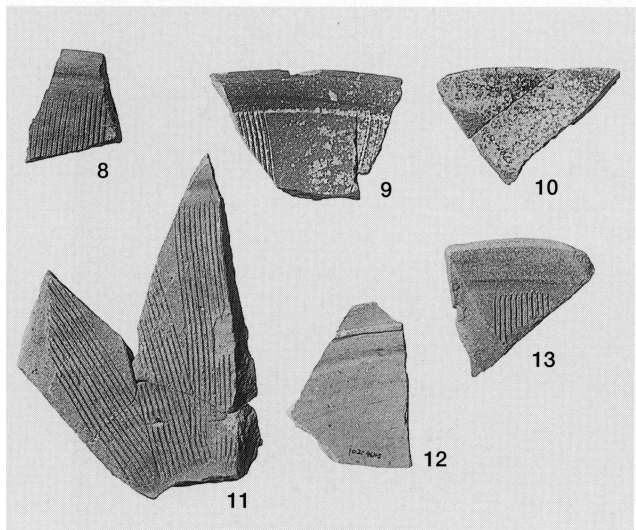
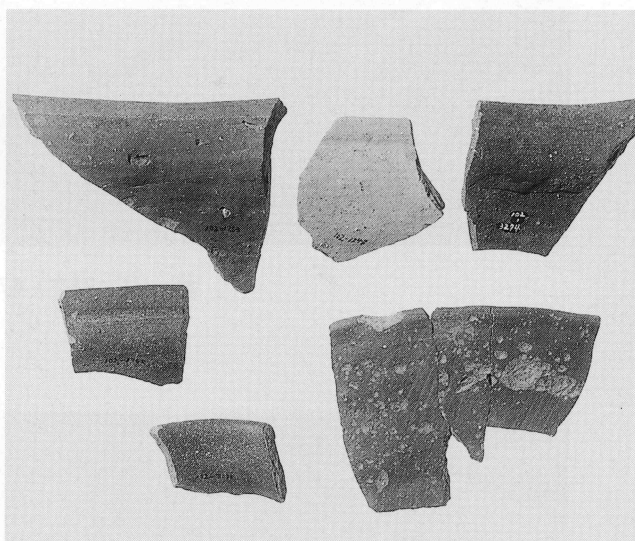
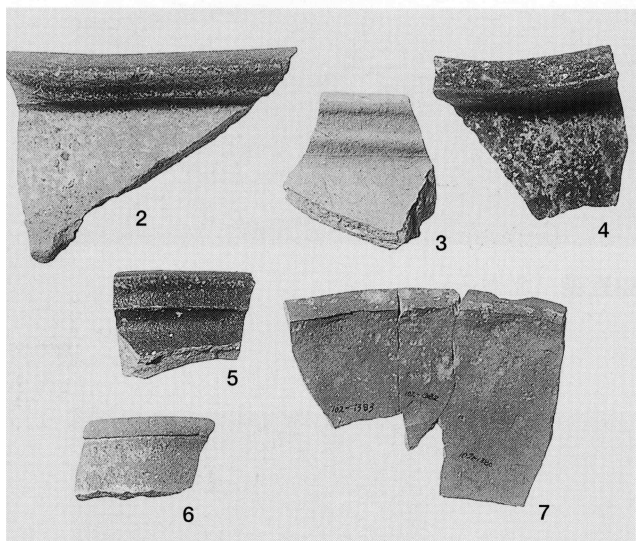
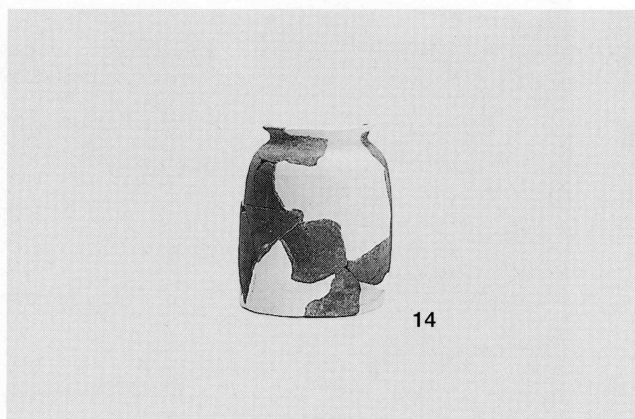
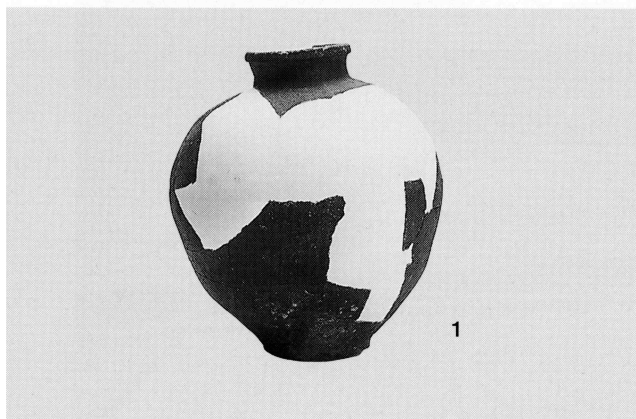
門 SI4762（西から）

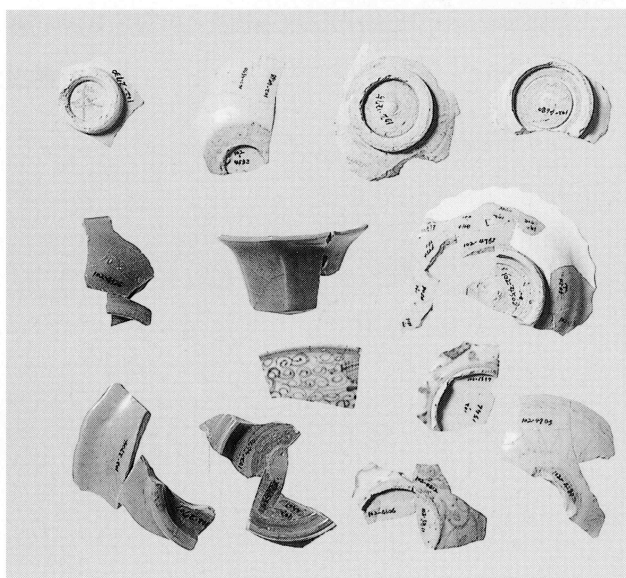
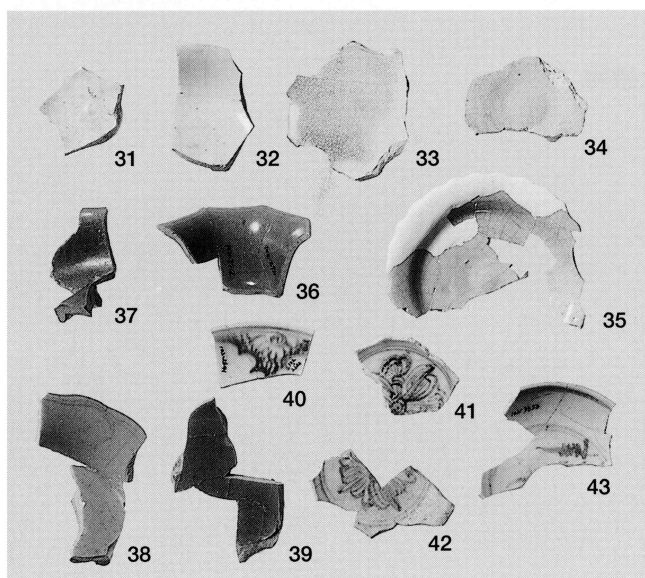
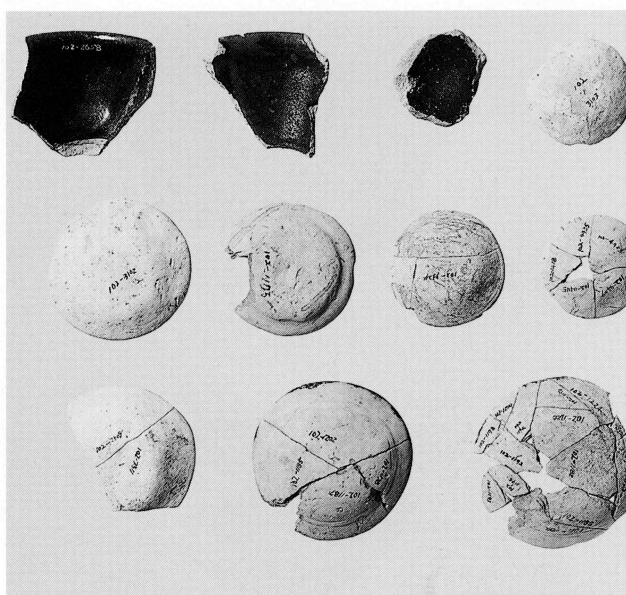
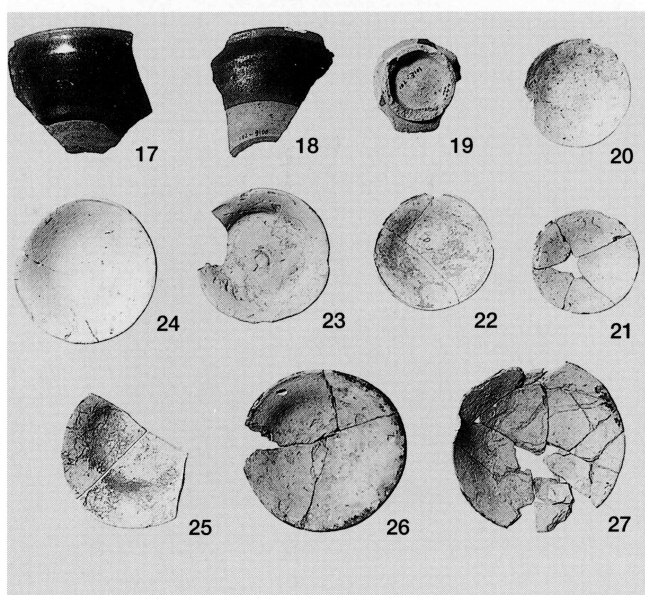
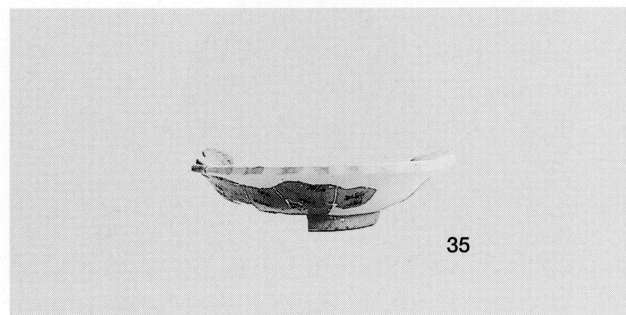
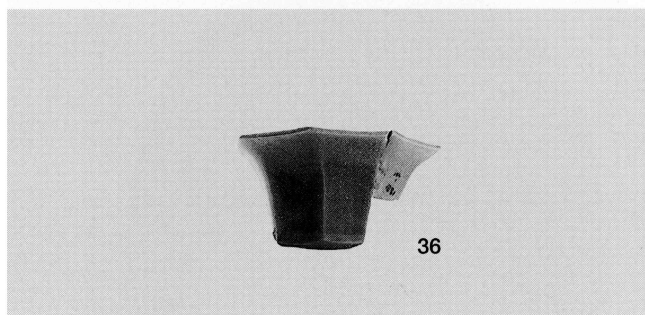


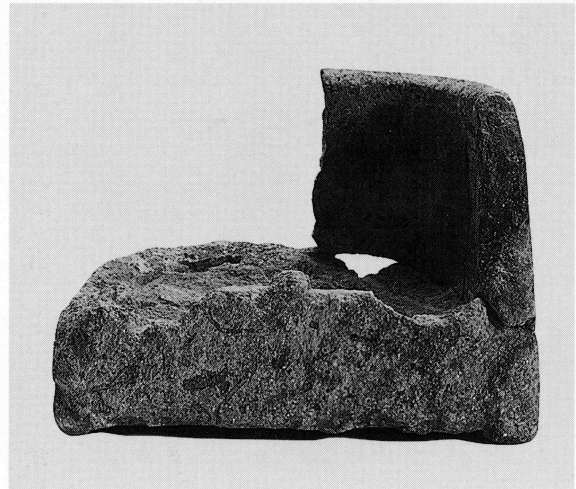
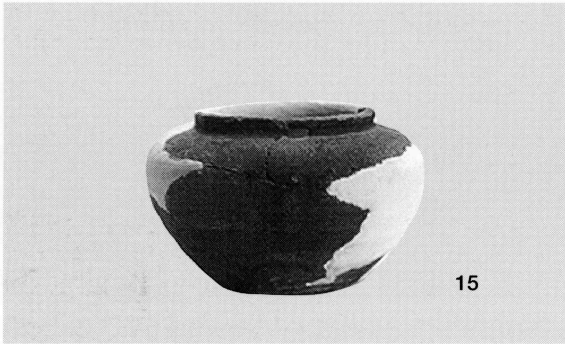
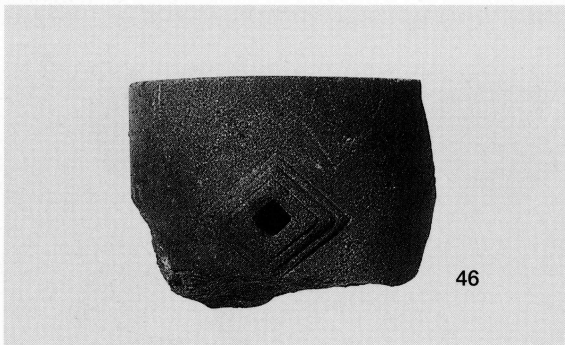
溝 SD4752・4753近景（北から）



石組遺構 SX4758近景（北から）







上層遺構出土遺物 (3)



石仏覆屋整備工（西から）



西山光照寺跡遺構復元整備工（東南から）



西山光照寺跡遺構復元整備工 (南から)



西山光照寺跡遺構復元整備工 (東から)



西山光照寺跡遺構復元整備工・入口階段（東から）



西山光照寺跡遺構復元整備工・地下式倉庫（東から）



石仏覆屋整備工（B棟）（南から）



石仏覆屋整備工（石仏展示収納棟）（西から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせき
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡
副書名	平成10年度発掘調査環境整備事業概要(30)
シリーズ番	30
編集者名	南洋一郎 水村 伸行
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL0776-41-2301
発行年月日	平成11年3月31日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
第102次調査	福井市城戸ノ内町 字斉藤地係	18210	史-31	36°59′ 37″	136°17′ 44″	980401～ 1220	2,300m ²	環境整備に伴う発掘調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第102次調査	武家屋敷	室町・戦国時代 (15・16世紀)	土塁石垣3,門2,道路 1,溝5,井戸1	越前焼,土師質皿,瀬戸美濃焼,青磁,白磁,染付	道路を挟んだ2区画の武家屋敷を確認した

特別史跡

一乘谷朝倉氏遺跡

平成10年度発掘調査環境整備事業概要 (30)

発行年月日 平成11年3月31日

編集・発行 福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館©

印刷 河和田屋印刷株式会社